

No.75

コミュニケーション

# Communication

動物園シンポジウム特集

2008年のシーズンを  
迎えるにあたって

モデル  
プレーリードック

げっ歯目リス科。北アメリカ周辺に広く分布し、昼行性で冬眠することはない。穴掘が上手で、平原や草原の地下に巨大な巣を作る。体は、円筒形で体長28～33cm、体重0.8～1.4kg。

寝たきり状態でまっちゃん...



## もくじ

- 3 2008年のシーズンを迎えるにあたって
- 4 特集 シンポジウム  
地方（秋田）の動物園を語る
- 18 飼育日誌から（2008年1月～2月）
- 19 飼育レポート「ゾウの調教を始めて」  
動物病院から「マーコールの蹄の治療」



ニホンイヌワシ



ワオキツネザル

## 2007年に 誕生した動物たち

※全てではありません。



シュバシコウ



カナダヤマアラシ



ニホンリス



# 2008年のシーズンを迎えるにあたって ミルヴェのテーマは「動物と語らう森」

大森山動物園園長 小松 守

大森山動物園ミルヴェは、2006年に制定された大森山動物園条例の設置理念（レクリエーション・命のつながり・命の学び）に基づいて経営されています。この設置理念とは別に、より具体的な活動指針ができないものかと考え、昨シーズン「動物と語らう森」をテーマに掲げました。来園者にミルヴェらしい何かを感じていただくと同時に、私たち園スタッフ自身がこのテーマに沿って目標を定めながら、より充実したサービスを展開できるよう、今年も再び「動物と語らう森」をテーマとして掲げます。物語は百人の読み手がいれば百通りの感じ方があるように、来園される方の動物園の感じ方、受け取り方も様々でしょう。しかし、ミルヴェにお越しになる皆さんに動物園の基盤にある大切なもの、すなわち動物の「いのち」を感じてもらいたいものです。

「いのち」を古い日本の言葉で「いきのみち（息の道）」と書いてある本を読んだことがあります。私たちと同じ息づかいをする動物の「いのち」を大森山の自然の中で感じていただけた時、それは「動物との語らい」ができた瞬間であり、来園者の皆さんと動物園スタッフがどこかでつながった時でもあります。「動物と語らう森」というテーマにはそんな意味を込めています。

今年はまだ、以下の取り組みも進めます。

これからも変わらぬご愛顧、応援を宜しくお願いいたします。

## ●ユニークな文化資本・動物園としての原点を見直します

動物園は、動物の「いのち」を巡る様々なドラマが展開するユニークな博物館と言えるでしょう。動物の飼育と種の保存を原点にしながらも、動物が生き生きと光り輝ける動物園にしてまいります。「動物と語らう森」を標榜するためにも必要なことです。

## ●新しい動物病院が完成します

「いのち」を伝えるための施設として、新しく健康管理センター（動物病院）が完成します。ここでは、動物の診療や療養の様子などを無理のない範囲でご覧いただくことも計画しています。病気や怪我と闘い、懸命に生きる動物がいることも知ってもらいたいし、それをお伝えすることも動物園の大切な仕事のひとつと考えるからです。

## ●新たな動物展示をめざす大型遊具の建設が始まります

（財）日本宝くじ協会から大型児童遊具が寄贈されることになりました。動物園ではそれを活かし、新たな発想で動物との出会いの場を創出したいと考えています。完成は平成21年春ですが、トナカイなどの草食動物ゾーン内に設置し、空中散歩しながら動物の息づかいをより身近に感じてもらうように工夫したいと考えています。

## ●より一層の工夫を凝らします

動物との出会いの場として、これまで行われてきた「まんまタイム」や「エサやり体験」などを新たなアイデアで工夫します。また、動物をより知ってもらうため、スタッフ一人ひとりのアイデアでいろいろな動物展示を演出してまいります。さらに、今年からポニーの乗馬体験も始めます。



## ●動物園の将来像を描きます

大森山動物園が秋田市民の財産として、いつまでも大切な、そして楽しい場所であり続けるためには、今ある施設を将来的にどう維持し、発展させていくのか、あるいはどう運営していくかが重要な課題です。秋田市民の動物園にふさわしい将来像（再整備）について検討を行ってまいります。

# 地方(秋田)の動物園を語る



佐竹 敬久 市長のあいさつ



三浦 亮 秋田大学学長のあいさつ

コーディネーター  
 課題提起  
 シンポジスト  
 シンポジスト  
 シンポジスト  
 シンポジスト  
 シンポジスト

西木 正明  
 小松 守  
 小宮 輝之  
 小菅 正夫  
 井上 正鉄  
 島澤 諭  
 若松 亜紀

(敬称略)

🍃 と き

平成19年11月23日(金・祝日)  
 午後1時から午後5時

🍃 と ころ

秋田大学 工学資源学部1号館  
 共通127教室 大講堂

🍃 主 催  
 共 催

秋田市 大森山動物園  
 国立大学法人 秋田大学



大森山動物園ミルヴェは、これまで子ども達の豊かな心を育みながら、楽しいレクリエーションの場を提供してきました。開園から30数年が経過し、大森山動物園を秋田の情報発信地のひとつとして、さらには、地域活性化の一翼を担えるように、新たな大森山動物園の夢づくりを進めたいと考えています。

そのため、平成19年11月23日、動物園界の代表者、自然環境や経済の専門家、子育て中のお母さんなど、多彩な顔ぶれの方々を迎え、シンポジウムを開催しました。

## プログラム

- 13:00~13:10 ● 挨拶  
秋田市長 佐竹 敬久  
秋田大学学長 三浦 亮
- 13:10~13:40 ● 基本課題提起「秋田の動物園が目指すもの」  
秋田市大森山動物園長 小松 守
- 13:40~16:00 ● 各シンポジストからの提言
- 16:00~16:10 ● (休憩)
- 16:10~17:00 ● ディスカッション・まとめ

## コーディネーター



### 西木 正明

日本ペンクラブ常務理事 (環境委員会)  
秋田ヒューマンクラブ会長  
作家

今日の動物園には、たくさんの役割が求められている。大森山動物園が掲げる「動物との対話」は非常に重要なコンセプトであるし、種の保全や環境保全の面で果たすべき役割も重要である。

アフリカでの戦争や内戦では、カバやゴリラなどの野生動物が大きな被害を受けた。人間の争いや営みが、野生動物や環境に重大な影響を及ぼしており、「動物の最大の天敵は人間」であるばかりでなく、「人間の最大の天敵は人間である」ともいえる状況にもなっている。こうした中で、動物や自然(環境)との共生に動物園がどのように関わっていくのかが問われているとも言える。

もちろん、現代の動物園はこうした時代の変化を敏感に感じ取り、大きく変わりつつある。旭山動物園の成功も、決して「アイデア勝負」ではなく、「動物園でなければ出来ないことをやる」という確固たる理念に基づいている。多くの人にそうした変化を感じ取ってもらいたいし、そのためにも実際に動物園に足を運んでもらいたい。

1940年生まれ。秋田県仙北郡西木村出身。秋田高校を1959年卒業、早稲田大学教育学部中退の後、平凡出版(現・マガジンハウス)に13年余り在職、1980年に退職し、作家活動に入る。デビュー作『オホーツク謀報船』(角川書店刊)で1980年第7回日本ノンフィクション賞新人賞受賞。1988年『凍れる瞳』『端島の女』(文芸春秋刊)で第99回直木賞受賞。1995年『夢幻の山旅』(中央公論刊)で第14回新田次郎文学賞受賞。2000年『夢顔さんによろしく』(文芸春秋刊)で第7回柴田錬三郎賞受賞。大宅壮一ノンフィクション賞・日本推理作家協会賞・オール読物推理新人賞・植村直巳冒険大賞・さきがけ文学賞等の選考委員。  
日本ペンクラブ獄中作家委員会および平和委員会委員。NHK国際放送審議会委員・国土庁審議会専門委員・秋田県総合開発審議会委員・海上保安庁アドバイザー・内閣府生活達人委員会委員・日本文学振興会評議員などを歴任。

## 【課題提起】

# 秋田の動物園がめざすもの



秋田市大森山動物園 ● 園長 小松 守

まずはじめに、大森山動物園のことについてご紹介したい。

大森山動物園のある大森山公園は市の南西部にあり、北斜面に動物園がある。公園全体の面積は約72ha、そのうち動物園は13.7haである。なお、このなかには沼なども含まれており、この面積全部を動物園として活用できるという訳ではない。

日本全国の動物園と比較してみても、大森山動物園は豊かな自然環境に包まれており、春夏秋冬の違いもはっきりとしているが、一方では冬期の条件は厳しい。

交通アクセスや立地条件は決して悪くはない。大森山の頂上に登ってみると、市内を一望できるほか、日本海や男鹿半島まで見渡せるなど、大森山のロケーションは観光面でも優れていると考えている。

大森山動物園は昭和48年に開園したが、それ以前は、市の中心部の千秋公園の中に昭和25年にオープンした動物園があった。

大森山動物園のオープン以後、随時各種の施設整備を行ってきたが、市民の手によって行われた整備もある。正面ゲート付近にあるキリンの「たいよう」と「モモ」の親子モニュメントや、イヌワシのモニュメントなどがそれである。このように、市民の思いが随所に溢れている。

だが、動物園の航空写真を見てもらえば分かるのだが、園内にはたくさんの動物舎が張り付き、手狭になっている。このことは、動物園の大きな課題でもある。

さて、本年度の大森山動物園は「動物と語らう森」をテーマに、これに沿った様々なことにトライしている。コーディネーターの西木氏の話にもあった「感情移入するものがな

くなってきている」今の時代にあって、動物が言葉を発することはないが、動物と会話できるような場面づくりを模索している。そのためには、動物たちの能力をどのように引き出すのかが課題であり、「動物たちをどのように演出してあげるか」が動物園の仕事ではないかと考えている。

例えば、チンパンジーやライオンの「まんまタイム」では、エサを求めて一生懸命ジャンプする姿に来園者は感動を覚えるのだが、これは一生懸命に動く姿、すなわち生きている動物の姿に感動するのである。だからこそ、動物園は、動物の能力をどう引き出し、どのように演出し、どう伝えるかが重要になる。

動物との対話も重要だ。キリンの「エサやり体験」を例にとると、普段の展示では、柵がキリンと来園者の間のバリア(障壁)となっており、動物のパワーを感じることは難しいが、「エサやり体験」でキリンの傍にまで近づくと、動物のパワーを感じることができる。動物のパワーとは「命」であり、この「命」を感じてもらい、あるいは感じるができる体験が大切なのである。

さらにフラミンゴだが、優雅な姿を遠くから見るのが普通だが、狭い大森山動物園の展示場ではそうはいかず、近くで、更に言えば手元で見せる工夫をしている。フラミンゴは臆病な動物で、優しさを持ってそっと近寄らないと警戒され、距離を置かれてしまう。だから、大森山動物園のフラミンゴ舎を「あなたがやさしくなれる場所」と私は呼んでいる。

このように、様々な「しかけ」を考え、実施しているほか、こうした「しかけ」とは別に、様々なイベントも実施している。「春のふれあいフェスティバル」や「雪の動物園」など

がその例である。こうした取り組みは、動物の楽しさや素晴らしさを伝えたいという思いからである。動物園でアンケート調査を行うと、「何がしたいか」という質問への回答は、「動物のそばに行って、触れてみたい」「エサをあげたい」が必ず上位にくる。こうした思いには可能な限り応えてあげたいし、様々な手法を用いてもっと楽しませてあげたいとも思う。

ところで、「動物を見る(見せる)」ということにとどまらず、もう一步踏み込み、動物園外の人たちと連携してジャズフェスタを開催している。このイベントは、もともと園内に生息する絶滅危惧種であるゼニタナゴの保全活動支援と視覚障害者の社会進出支援を目的としたものであるが、ジャズを聞くため、いままで動物園に来ることがなかった人も足を運んでくれ、「動物園もなかなか面白いじゃないか」と言ってくれるなど、一定の成果があった。もちろん、こうした取り組みの根底には「命をつなぐ」という、動物園が果たすべき使命があることは言うまでもない。

また、絶滅危惧種のゼニタナゴが生息できるほどに園内の環境が保たれているということは、地域の生態系保護に動物園の存在そのものが重要な役割を果たしているということでもあり、ゼニタナゴの保全活動は更に進めたいと考えている。

ところで、大森山動物園には園の設置を規定した条例がある。この条例は市民と一緒に作ったもので、今後策定しようとしている動物園の再整備構想もこの条例がベースになる。

大森山動物園は、人間性を取り戻す「リ・クリエイト(re-create)する場」、命を感じて「命を学ぶ」、「命をつなぐ」という役割を果たそうと努めている。これらに加え、動物園は「自然に癒やされ」「生き物を感じて」「自然を知る」場でもある。こうしたことよって「人が訪れ」「人が集う」場所にもなることから、観光につなげていくことも必要である。動物園の文化施設としての役割は堅持しながら、秋田の元気にお手伝いをする場として、地域

活性化にも貢献していきたいと考えている。

さて、大森山動物園の再整備構想だが、まずは動物園が抱える様々な課題がある。

課題のひとつは、施設の老朽化であり、今後、園の施設をいかに維持していくのかが大きな課題である。

園を取り巻く自然環境にも課題があり、例えば、松枯れ病により園内の植生がかなり痛めつけられており、植生回復も重要である。

また、観光施設としての環境・施設の整備や、新たな視点から、大森山公園内の自然が多く残っているエリアをどのように動物園と関連づけていけるのかについても模索しているところである。また、動物園と大森山全体をどのような回遊計画を描けるかもポイントとなる。

加えて、どの動物園にも共通することであるが、動物園の運営や施設整備にはお金がかかり、その財源確保は大きな問題である。実際、市民の税金に大きく依存している大森山動物園にとっては、存続にも関わる重要な問題である。だが、この問題を抜きに考えることはできず、頭の痛いところである。

先に述べたとおり、大森山動物園には「リ・クリエーション」「命の学び」「命のつなぎ」という役割があるが、これをどのように具現化していくかが求められており、これらの関係性は崩さず、同心円状に昇華させていかなければならない。

大森山動物園がめざす再整備の考え方は「ミルヴェ いのちの森」の言葉に集約し、大森山公園と一体化した周遊性のあるスポットにしたいと考えている。私は、例えば大森山の谷をイヌワシが辺りを自由に飛び回る「イヌワシの飛ぶ動物園」も夢見ているし、多くの子ども達の「動物とふれあいたい」という思いを大切にしながら、日本の豊かな自然環境の中で生まれ、根底に息づく「日本人の心」も大事にして動物園にしてみたい。

命や自然を体感できる動物園、感性を大事にした動物園を目指しながら、観光振興にもつなげていきたいのである。



# 上野動物園の歴史を作ってきたのはクマ 大森山動物園には在来種の保護や飼育も期待



東京都恩賜上野動物園 ● 園長 小宮 輝之  
(社)日本動物園水族館協会会長

明治15年の開園から125年、開園に向けた準備期間まで入れると135年の歴史がある上野動物園だが、開園のきっかけは、西洋に扉を開くため「万国博覧会に出品しよう」ということであった。

135年前の明治5年、ウィーン、パリの万国博覧会に出品する物品が湯島聖堂に集められた。ウシは但馬牛、北海道からはアイヌの飼育係付きでヒグマという具合に、各地自慢の動物も集められた。10年後の明治15年、それらをもとに上野動物園が開園するのだが、開園当初から、ヒグマ、ツキノワグマ、チョウセンクロクマ(ヒマラヤグマ)などのクマがいた。

当時、博物館などは農商務省の所轄であったため、上野動物園も農商務省の管轄であった。4年後、殖産関係のものは農商務省、歴史や美術関係のものは宮内省となったが、こうした流れの中で、動物園を切り離すことも検討されていたようだが、動物園が一番収入を上げていたため、それまでどおり天皇家の動物園となった。

天皇家の動物園ということもあり、その後の上野動物園には、各国からシフゾウ、ラクダ、ゾウなどが贈られることになった。そのなかに、シヤム、現在のタイから贈られた、名前もない、ただ「あばれ象」と呼ばれていたゾウがいた。「飼えない動物は射殺するのが当たり前」という考えの外国人などからは、「どうしてそのようなゾウを飼うのか」という抗議もあったようである。このゾウは、関東大震災後、浅草の花やしきに貰われていったのだが、60数年生きた。これは世界的に見ても長生きの記録である。

こうした例からも、日本と海外の動物観の違いを見い出すことができる。「たとえ縛り

付けてでも最後まで生かす」と考える日本人と、「飼えなくなったら、手に負えなくなったら殺す」と考える海外の違いである。同じようなことはヨーロッパの動物園でもあり、例えば、シカを動物園内で自然に繁殖させるとどんどん増えるのだが、これを殺してリカオンのエサにしている例がある。要は「自然界の状況・関係と同じ」という理論である。こうしたことは、日本人にはできない。

さて、その後の上野動物園であるが、関東大震災後、宮内省が動物園を持ちきれなくなり、今から約80年前、東京市へ下賜となった。東京市へ下賜となった上野動物園では、ハーゲンバック動物園を参考に、初めて檻のない猛獣舎として、シロクマ舎を作った。海外のものを参考にしながら一生懸命に作ったからなのか、このシロクマ舎の一部は今でも使われている。このシロクマ舎はあと20年は生かし(存続させ)、「日本にも100年以上も使われている獣舎がある」ということを示したいと考えている。

時代は過ぎ、第2次世界大戦中の上野動物園といえば、ゾウやライオンなどの猛獣が処分されたことを覚えている方がいるかもしれない。昭和18年に27頭の猛獣を処分しているのだが、そのうちの8頭はクマで、処分後、その場所ではブタを飼っていた。3年後、疎開していた猛獣の復員もあり、新潟と岐阜に疎開していたクマの復員が最初であった。

これは余談だが、人気のパンダも実はクマである。DNAで調べてみてもやはりクマであり、これをあえてパンダ科としたのは、政治的・経済的分類ではないかと考えている。

動物が不在ということについては、ライオンの例もある。上野動物園では「ブーストック計画」に取り組み、ライオンを多摩動物園

に移した。このことにより10年間、上野動物園にはライオンがいなかった。この間、投書箱には「ライオンがいなかった」「ライオンを見たかった」という投書が一番多かった。なお、インドライオンの導入によって、ライオンの展示は復活している。

さて、近年の上野動物園の歴史は、来園者の増加に対応するための施設分散の歴史といってもよい。来園者が増え、動物をきちんと見てもらうことが困難になったため、井の頭自然文化園を作って来園者を分散させ、インドゾウの導入によりさらに入園者が増加したことを契機に多摩動物公園を作り、パンダの導入によりますます入園者が増えたため、水生生物を分けて葛西臨海水族園を作ったのである。ただし、マスコミは、そうした部分は一切報道してくれず、ただ「努力が足りない」と批判する。

私は、動物園の入園者数をその園の面積で割った数値をその動物園の入園者密度、簡単に言えば混雑の度合いとして考え、これをひとつの目安としている。この数値で比較すると、上野動物園は今でも世界一過密であり、多摩動物公園は理想的である。大森山動物園も、ヨーロッパやアメリカの動物園並みの数値となるようがんばってもらいたい。

さて、最近の上野動物園のクマであるが、新しいクマ舎「クマたちの丘」では二つの取り組みを行っている。ひとつは、日本の里山の自然環境により近づけ、爪痕や足跡を見せる試みであり、もうひとつは冬眠である。また、クマとタヌキという異種間の展示場共有の試みも行っている。

冬眠は特に注目されてるのだが、冬眠中のクマはエサを食べず、糞もせず、11キロも体重が減少することが分かった。また、冬眠前の秋にはエサをガツガツ食べるのに、冬眠後の春にはそれほどエサを食べない。山(野生)では80キロでも大型と言われるクマが、動物園では100キロを超えるものがざらにいる状況から考えると、あらためて冬眠の重要性を認識した。一方で冬眠させるためにはクマを冷蔵庫に入れることになるため、マスコミから

の批判もあった。だが、冬眠の重要性を考えると、動物福祉にも適っていると考えている。

最近では、減少した日本の在来馬の保護にも力を入れている。種子島のウシウマや木曾馬、トカラウマなど、日本人と深く関わってきたウマが減少・絶滅し、多くの日本人はサラブレッドとポニーしか見たことがないという現状にあって、いわば原点回帰の考えである。

国連機関からの働きかけもあり、動物園にとって、種の保存や、域外保全と域内保全も含めた環境保護・教育といった役割は世界共通である。大森山動物園のイヌワシやゼニタナゴの保全活動は高く評価されており、一種のステータスにもなっている。さらに、動物園には文化財としての動物を保護し、飼育するという役割も考えられ、秋田の動物園としては、在来種である秋田三鶏の保護や飼育に取り組むことにも意義があるのではないかと。



#### 【略歴】

1947年、東京都生まれ。明治大学農学部卒。1972年に多摩動物公園の飼育係になり、日本産動物と家畜の担当し、ノウサギや鳥類の飼育繁殖で技術表彰を受ける。多摩動物公園と上野動物園の飼育課長を経て、2004年から上野動物園園長。現在、日本動物園水族館協会の会長も務める。主な著書に「日本の哺乳類」(学研)、「今日も動物園日和」(角川学芸出版)、「ウサギのかいかたそだてかた」(岩崎書店)など。

## 「行動展示」から「共生展示」へ 厳冬期にこそ輝く旭山動物園の動物たち



旭山市旭山動物園●園長 小菅 正夫  
(社)日本動物園水族館協会副会長

動物園における展示方法は、以前は「形態展示」が主流であった。この方法では動物は何もやることがなく、じっとしているだけである。現在、世界の流れは「生態的展示」に移行しているのだが、これは自然豊かな動物舎づくりなどの環境づくりにより実現されている。こうした環境づくりは、動物にとって「何もやることがない」状態から、「やることがある」状態に状況を変化させることになる。これが旭山動物園で取り組んでいる「行動展示」である。

また、「形態展示」では鉄とコンクリートの素材によりできた動物舎での「平面展示」であったが、自然豊かな動物舎づくりによって3次元での生活となり、「立体展示」にもつながった。

旭山動物園では現在、これをさらに進めて、「共生展示」にも取り組んでいる。これは、ひとつの空間・環境のなかに、主な生活場所や食性を異にする多種の動物が生きていけるように飼育・展示するという考え方(展示方法)である。

具体的には、カピバラとクモザルを共生展示している。マスコミでも取り上げられた、カピバラのエサを狙って水の中に入ったクモ

ザルをカピバラが襲うというハプニングもあったが、「共生展示」の考えを捨てるつもりではなく、むしろ進めていくつもりである。今回のハプニングの問題点は、緊張感のある暮らしがないが故の事故であるということである。緊張感のある暮らしは、ストレスではない。ある程度の緊張感がないと、動物は生き生きとしない。これは人間も同じである。要は、どうしたら動物が幸せに暮らせるか、幸せに見えるかなのである。

次に、動物園を取り巻くいくつかの社会的変化について述べたい。

その第1は、世界的な人口増である。現在地球上には約67億人の人間がおり、人間が生きていくために野生動物の生息域が狭まり、その数が減少している。だが、飢餓に悩む人間に対して、「野生動物のために空腹を我慢しろ」と言うことはできない。

第2としては、リクリエーションの多様化である。テーマパークや外国など、余暇の過ごし方は多様化している。

第3は、メディアの発達である。マスメディアには魅力的な動物の映像があふれているが、それは野生の動物にとっては特別な一瞬である。だが、そんな映像に慣れてしまった人にとって、寝てばかりの動物(園)はつまらなく見えてしまう。

さらに、最近の新しい考え方として「動物福祉」というものがある。動物にも幸せに暮らす権利があるという考え方であり、ある意味では当たり前のことである。だが、これが先鋭化してしまうと、「動物園の中の動物はかわいそう」となり、ついには「動物園などないほうがよい」という主張にまで行き着いてしまう人がいるのは考えものである。なお、動物園での飼育環境は、動物本来の生息地の





環境と比較すると、どうしても狭く、単純で、変化が少ないものになってしまう。こうした飼育環境に工夫を加えて、環境(environmental)を豊かで充実(enrich)したものにしてという「環境エンリッチメント」という考えも提唱されている。

こうした変化に対して、多くの動物園では環境教育や種の保存などの活動をアピールしたり、自然の中にいるような飼い方をするなど、より魅力的な展示方法を模索したりしており、旭山動物園では、行動展示や能力展示など、感動を与える展示をめざしているのである。

さて、世界中の動物園には、娯楽や人間性の回復といった「リクリエーション」、繁殖や動物行動学などの「研究」といった役割に加え、生命や環境といった「教育」面での役割も期待されており、こうした役割を果たさなければもはや動物園とは言えない。さらに、地域の野生動物に責任を持つという「自然保護」という4つ目の役割もあり、現代の動物園はこのことを軽視することもできない。

こうした役割を果たすための活動例としては、鳥インフルエンザやSARS（重症急性呼吸器症候群、Severe Acute Respiratory Syndrome）といった人と動物の感染症研究がそれにあたるし、細胞保存や人工授精などによって動物を絶滅させないための努力もそうである。また、北海道の動物園が共同で行っている動物の野生復帰や自然保護も、動物園としての役割を果たすための活動の一環である。

さらに、先にも述べた「リクリエーション」という言葉には「娯楽」と「人間性の回復」という二つの意味があるが、動物と一緒に居て幸せだと感じる人は動物を守る人になり得るための、野生動物保護の原点と言えるのではないか。旭山動物園のスタッフは、「旭山動物園が野生動物を守り、地球を救う」という気概を持っている。こんなことを言う人笑う人いるのだが、これだけの自信を持って仕事をするということが重要なのである。

最後に、冬の旭山動物園の見どころを紹介したい。

第一は、旭川の冬が最もよく似合うホッキョ

クグマである。ホッキョクグマは冬が一番美しく、そして格好良く見える。また、ホッキョクグマはよく遊ぶ。雪などで体を冷すことのできる冬は、暴れるように遊ぶ。遊んでいる動物がいるということは、その動物がそこそこよい環境にいるということもできる。このように、雪のある動物園にしかできないこともあり、地域性あふれる展示を心がけている。

第2はアザラシである。自然下では、空中にはカモメの仲間が必ずいるし、水中には魚もいる。このように一緒にいて、ともに生きていることに意味がある。また、展示館のチューブをアザラシが通る様子はマスコミ報道などでご存じのことと思うが、アザラシは自分の意志でこのチューブの中に入って行き、自由自在にUターンする。さらに、この中に3頭一緒に入ることもあり、こうした様子はまるで軟体動物のようで、とても骨があるとは思えないのだが、これこそ生きていることである。さらに、アザラシは雪があると手足も使わず斜面を登っていくし、動物舎を出てお客様の方にまで遊びにも行く。

旭山動物園は日本一北に位置し、当然冬は厳しい。だが、旭山動物園が最も輝くのは冬である。真っ青な空に雪が輝き、動物たちも生き生きとする、どこにもない冬である。

有名になったペンギン・パレードもとても美しい光景だし、ペンギンのトボガン（腹這いになって滑っていく行動）を見られるのも旭山動物園だけである。

最後に一言。

動物園 行ってみるなら 冬の旭山

#### 【略歴】

1948年、北海道札幌生まれ。北海道大学獣医学部卒業。1973年、獣医師として旭川市旭山動物園に就職。飼育係長、副園長を経て、1995年から同園園長を務める。

日本動物園水族館協会副会長など各要職を兼任。

著書に「命のメッセージ」（竹書房）ほか。

## 大森山動物園を核とした自然学習ラインを 学習施設の整備も必要



国立大学法人秋田大学 ● 教授 井上 正鉄

私はコケの研究を専門としている。コケは世界中の様々な環境の中に生息しており、それを現地に赴いて採取してきた。そのため、世界中のいろいろな場所に行った。日本列島はもちろん、北極や南極、辺境と言われる地域にも行った。そうした際に、偶然野生生物の営みを目にするのができたのだが、その経験はまさに「宇宙船地球号」を実感するものであった。

こうした経験とは別に、私自身の子育て中の動物園との関わりについても、たくさんの思い出がある。大森山動物園がフタコブラクダを導入した際、上の子どもを連れて見に行った。また、下の子どもが初めて「二足歩行」をした記念すべき日は、大森山動物園の広場でお弁当を食べた直後であった。

さらに、上の子どもを上野動物園に連れて行った時のことだが、帰り際に何故か「ゾウのぬいぐるみを三つ欲しい」と言い出した。聞けば、お父さんとお母さん、そして自分の分として3個買って欲しいのだと言う。このように、動物園は子どもにとっても感情移入しやすく、人を優しくしてくれる場所であり、多種多様な動物の営みを見るということによって命の尊さを学んだり、自然に関わる様々な事柄を肌で感じ取ることができるのである。



こうした生き物の息吹を感じるということとは別に、世界的には、生物の多様性をいかに保っていくかという種の保全の問題や、環境の劣悪化による絶滅危惧種の増大などの問題が顕在化しており、動物園はそうしたことを学ぶ絶好の場所でもある。

動物園には、生きた素材として多種多様な動物がおり、それを身近なものとしてとらえることができる。大森山動物園や上野動物園には何度も足を運んだが、その度に子ども達の目は輝いていた。そして、動物の動きや姿に感嘆の声を上げる。動物園は、こうした幼児期の純粋な輝きを生涯持ち続けていく一助になるものではないかと思う。

ここで、世界各地を訪問した際に目にした動物や、その時に感じたことなどを紹介したい。

中国では、社会構造の変化により牧場化が進んでおり、自然が狭められ、自然保護との共生が課題となっている。

カナダでは、シーラカンスの剥製を見ることができるのだが、シーラカンス自体は現在でも存在する。環境さえよければ生き続けることができるという証である。

種の絶滅ということに関連して言えば、日本ではエゾオオカミが人間が生きていくために狩猟され、絶滅している。

進化の袋小路に入ったと言われるモーリシヤスのドーダーは、最初に入植したオランダ人が食肉用にブタを導入したことにより駆逐され、その後に入植したフランス人には狩猟の対象となり、絶滅してしまった。

動物園には動物を見るための様々な仕掛けがあるのだが、こうしたものを通していろいろなことを考えることができる。自然を見せてくれる動物園に足繁く通って欲しい。「Study Nature, Not Book or web」である。

多感で、人間形成に重要な時期にある小学校高学年や中学生、高校生の入園者数が少ないことが気にかかる。だが、秋田大学附属中学校の校長を務めた経験から言わせてもらえば、これは仕方のない面もある。

規律や安全ということが叫ばれ、そういったものに縛られている子ども達は、かつての私たちのように、自分たちだけで自由に山や川、海に行くことは難しい。また、子ども達自身も積極的に外へ出ようとはしない。このような状況下にあつて、幼児期には親と連れだって、あるいは親に連れられて頻繁に動物園に足を運んでも、こうした年代の子ども達の足は動物園から遠のいてしまい、動物や命への関心も途切れてしまうのが現実である。一旦そうなってしまうと、小中学生に比べれば自由に外出できる高校生になってから「動物園に行ってみたら」と言われても、「動物(園)なんて、ダサい」ということになってしまう。

動物園は努力していると思う。先ほどからの話を聞いていてもそう感じる。だが、現実を変えていくということになれば、大森山公園の中に中高生が積極的に活用できる学習施設を作るというのも一案ではいかと思う。

秋田県には東北を代表する白神山地や鳥海山がある。また、秋田市には、野外活動も可能で、中学生でも4クラスが宿泊が可能な秋田市太平山自然学習センター「まんたらめ」もある。大森山動物園を核としながら、「まんたらめ」を活動の中心に、各図書館、男鹿水族館、白神山地、鳥海山などを太い線で結び、自然学習のための導線となる学習ラインを構築することを提案したい。

また、このラインには、約100年前に日本人として初めて南極の大自然に挑んだ白瀬<sup>のぶ</sup>蘂を記念した白瀬記念館を組み込むこともできる。

さらに、秋田駅に隣接している秋田拠点センター「アルヴェ」内の秋田市民交流プラザ内に設置され、人気施設となっている「自然科学学習館」の大自然版的な施設の設置も考えてもらいたい。この施設は、秋田県立博物館にはないか、あるいは手薄な部分である自然や地球の大自然を教材にしながら、現在の

生物の存在に深く、ダイナミックに関わってきた地質的・気候的な変化の様子を継続的に学習できる施設である必要がある。

なお、資金の問題については、国や近県からも協力を求めながら、大きなものとしてはどうか。

最後に、大森山動物園には、「動物が好きで、好きでたまならい」という飼育係が大勢おり、ある意味では、街の中よりも安全であるとも言える。どうか、小学生、中学生、高校生が前向きに訪れることができる動物園になってもらいたい。



### 【略歴】

1949年、長野県生まれ。広島大学大学院理学研究科博士課程植物学専攻修了、理学博士。1981年秋田大学助手、1990年から教授。2003年4月～2006年3月、秋田大学教育文化学部附属中学校長を兼務。

1985年11月～1987年3月、第27次南極地域観測隊員として南極で越冬。1988年11月～1989年3月、南極条約にもとづく文部省派遣交換科学者として、中華人民共和国長城基地で共同研究を行なう。カナダ、ハワイ、中国雲南省、韓国(濟州島)、フィンランド、北極圏のスピッツベルゲン島などで学術調査を行なう。

研究分野は、植物分類・生態学(特に日本及びアジア産地衣類の分類学的研究、南極産地衣類の分類・生態学的研究)。



## 地域経済や地域コミュニティのために 大森山動物園が果たしうる役割



国立大学法人秋田大学 ● 准教授 島澤 諭

秋田県の人口は、そのピークが昭和31年であった。その後、1981年に2度目のピークを迎えたが、それ以降は26年間連続して減少が続いている。2001年以降、減少の幅は大きくなっており、毎年1万2千人ほどのペースで減少している。2007年10月に秋田県の人口は112万人にまで減少しており、2035年には78万人にまで減少するという予測もあるなど、人口減少は日本一である。

一般に、人口減少の要因としては、死亡する人が多い「自然減」と、出て行く人が多い「社会減」とがあるのだが、秋田県の場合は半数以上が「出て行く人」、すなわち「社会減」である。この理由として、まず第一に、所得水準の低さとの関係、つまり経済の面が考えられる。例えば、東京と秋田の所得水準の違いであるが、産業振興などにより所得水準が上がれば、こうした人口減少を食い止めることができると思うこともできる。

人口減少の二つ目の理由としては、少子高齢化の進展が挙げられる。人口減少の局面は過去にも2回あったのだが、働き手となる若い人の減少は活力の低下につながる。現在、日本の高齢化率、すなわち65歳以上の方の割合は28.1%である。私の経験上、国の予測は

悪い方に外れる傾向にあるが、国では2035年にこの割合が41%になると予測している。秋田県で見ると、上小阿仁村の2006年における高齢化率が41.3%であり、ひとつの例となろう。一方で、14歳未満の年少人口の減少も大きな影響を及ぼす。人口減が続くと、現在は55万人である労働力人口が、2035年には22万人減の33万人に減少するとの予測がある。22万人という数値だが、現在の秋田県の第1次産業従事者が約6万人、第2次産業の従事者が約15万人いるのだが、これらを合わせた人数分がなくなるということである。さらに、労働力人口の減少により、秋田県の経済規模も1兆円減の3兆円程度になってしまうなど、衰退は不可避である。

過去において、景気の回復は所得や雇用者報酬の格差縮小に作用したが、小泉構造改革以降、景気が回復しても所得や雇用者報酬の格差は拡大する傾向にある。

秋田県に目を向ければ、全国と比較しても所得水準は低い。なお、この原因は第1次産業に偏った産業構造に起因している。例えば、第1次産業は機械により生産性が向上するというものではなく、労働力を多用する産業である。そのため生産性が上がらず、賃金も上がらないという悪循環に陥りがちである。一方で、第2次産業や第3次産業においては、労働力を必要とする(人手をかける)ことはマズい(経営上問題がある)と考える。

こうしたことから、観光業などによって他県や他国から人を呼び込み(交流人口を増やして)、秋田にお金を落としてもらうことにより振興する必要がある。

さて、人口減少が地域経済に与える影響には短期的なものや長期的なものがあるが、まずは短期的効果について考えてみたい。



人が減ると、企業としてはやはり人が必要であり、人集めのために賃金を高くする。このことにより所得は上昇するが、秋田県にはこうした形で賃上げに対応できる企業が少なく、人集めのために無理に賃上げをしてしまうと、これに耐えられなくなり、中小企業では倒産、進出企業は撤退ということになってしまうと収入は減少する。すると、それにもなって税収も減り、行政による社会的インフラ整備ができず(進まず)、さらに人口減少に拍車がかかり、地域社会の崩壊や経済破綻が起こる。

こうしたことが起こらないようにするためには、やはり交流人口を呼び込むなど、定住人口に依存しない産業構造が必要である。だが、必ずしも観光資源に恵まれているとは言えない秋田県にあっては、イベントや歴史・文化施設に頼るしかないという状況である。

観光客の推移を見てみると、ほとんど変化はないし、県内・県外の観光客数にも大きな変化はない。行き先としての動物園は歴史・文化施設に分類されるが、そのウエイトにも変化はないものの、減少傾向にはある。

地域内経済循環を活性化させるための方策としては、ボランティア活動や課外活動によってコミュニティを活性化する方法がある。また、こうした活動の報酬等として地域通貨を導入するとともに、それによる余剰資源の売買ができる場としての市を常設化するなど、地産地消を進めるなどの取り組みが必要ではないか。

そのためには、まず大森山動物園が、秋田県民・市民にとって魅力ある動物園「おらほの動物園」とならなければならない。地元で愛されることなく、県外からの人(交流人口)を呼び込むことなどできない。

そのような動物園になるため、大森山動物園にはサポーター制度の導入や、市民・県民の出資によるファンドの創設を提案したい。

特にファンドについては、仮に約33万人の秋田市民が一人あたり1千円ずつ出せば、あるいは、112万人の秋田県民の3分の1の人が1千円ずつ出し合えば、3億3千万円ほどの基金となり、現在課題となっている財源不足

解決の一助となる得る。さらに、ファンドへの出資者には、イベント等の企画・立案・実行に参加してもらうほか、PR等へも参加してもらえば、動物園に対する愛着や誇りがより一層強まるであろう。また、こうした活動により、大森山動物園は住民間のみならず、住民と非住民の交流拠点ともなり得る。

秋田市の観光資源として大森山動物園は大きな期待を持たれている。前述のとおり、地域経済・社会の活性化のために大森山動物園が貢献できることは、県外貨を獲得することと、地域内経済循環の拠点や地域コミュニティの交流拠点となることである。

県外貨の獲得についてだが、平成17年における宿泊や日帰り旅行による経済効果は約1802億円あり、その波及効果は1346億円、税収は13億円、雇用は1万人と考えられている。この約7割は県外客からもたらされたものであるが、仮に大森山動物園を目的に秋田を訪れる人が10万人増えると、その生産波及効果は13億円、雇用は136人増えると予測できる。さらに、日帰りだった人の10人に1人が宿泊すると、その生産波及効果は209億円、税収は2億円、雇用は2000人増えるのである。

もちろん動物園には、生活や仕事の問題やストレスを忘れて、くつろいだ雰囲気の中で人とかかわりをもつことが出来る第3の場所「サードプレイス」としての役割も期待されていることは言うまでもない。秋田が持続可能な、魅力ある地域コミュニティであるためにも、動物園の果たす役割は大きい。

#### 【略歴】

1970年、富山県富山市生まれ。東京大学経済学部卒業。1994年、旧経済企画庁入庁。調査局・計画局・調整局等で日本経済の調査・分析、経済政策の企画・立案に従事。2001年、省庁再編を機に内閣府退官。早稲田大学、秋田経済法科大学等で教鞭をとる。

研究分野は、日本経済論、経済政策、世代の経済学、シミュレーションモデル、社会保障論など。

# 子育て世代からの期待 大森山動物園に望むこと



陽だまりサロン●代表 若松 亜紀

現在子育ての立場から、また、実際に動物園を利用している立場から、大森山動物園に期待することを述べてみたい。

大森山動物園に期待することは、次の3点ある。

- 1 命を感じる場であること
- 2 子どもの輝きを引き出す場であること
- 3 土の上で遊べる場であること

シンポジストの方々の講話を伺うと、動物の生命に関する話しには説得力があるし、胸を打たれるものもある。最近の秋田県は、自ら命を絶つ人がいたり、我が子を殺める事件もあった。こうした中であって、命の大切さを伝える活動には意義があるし、その重要性も増している。

自分自身は多くの親と接する仕事をしており、この痛ましい事件の後には特に命の大切さを伝えたいという気持ちが強まった。また、自分自身も流産の後に出産した経験を持っている。死産を経験した人や生まれた赤ちゃんを亡くした人と接する機会もある。ひとつの命が生まれ、その命が生き続けることは決して当たり前のことではなく、とても有り難いことだと考えている。自分の子どもをこの手に抱ける喜びは、奇跡かもしれないとさえ感じる。



仕事柄、幼稚園などの保護者会などで話しをさせてもらう機会があるが、命の大切さを伝えたいと思っても、プライバシーの問題などがあり、人間をベースに話すには限界がある。心で感じたことを誰かが言葉にしてくれれば、腑に落ちることもあるし、動物であれば、伝えやすいこともある。動物を通して見える命の尊さや素晴らしさを伝えて欲しい。

さて、子どもに自信をつけたり、子どもの個性を伸ばしていくということは、その子どもが持つ固有の価値を見いだすことである。

「キラッ」と光る何かを見つけ、引き出すことである。これは、学校に限ったものではないし、どこで見つかるかも分からない。その子どもが持っている良さや可能性を誰かが見つけ、引き出してやらなければならない。

動物園であれば、動物という私達とは別の視点から見つかる固有の価値があるかもしれない。ミルヴェ教室や遠足などがそうした機会となり得るのではないかな。

いろいろな機会に動物園について聞くと、「安心して子どもを走り回らせることができる、貴重な場」という意見を多く耳にする。動物園本来の目的は、動物を見る(見せる)ことであるのだが、これを一步進めて、「土の上で、ワクワクして、遊べる場」であってほしい。

アスファルトの上ではなく、「土の上」であることが重要である。「土の上」は単純に「気持ちがいい」ということもあるが、「土の上」にいるとエネルギーをもらって元気になれる。

また、既存の遊具ではなく、子ども達が自分自身で発展させていける遊具があればなお嬉しい。大森山の遊園地が再開されるというニュースや、新たに大型遊具が設置されるという報道を耳にしているが、人工的が遊具よりも、自分で遊びを発展できるものがあれば



と思う。

加えて、子どもが入れる水辺があればとも考えている。プール、水辺、水たまりと、子どもは水が大好きだが、水質汚染の問題もあって規制され、実際に遊べる場所は少ないのが現状だ。大森山であれば、魚やザリガニを捕って、それを動物たちのエサにするというようなことができないものかと思う。さらに、大人も元気がもらえる、秘密基地のような遊び場づくりも提案したい。



### 【略歴】

1968年、秋田県仙北市生まれ。秋田大学教育学部を卒業後、私立秋田南幼稚園に7年間勤務したが、閉園により退職。

2001年、自身の保育経験・育児経験を綴ったエッセイ「心で感じる幸せな子育て」出版。それを機に、教育関係の広報誌などへの連載、子育て講座・講演活動、ラジオ子育てコーナー担当、イラストやエッセイ執筆など活動の場を広げる。

2005年より、自宅を解放し「出会いと生きがい創りの場・陽だまりサロン」を運営。

上記のほか、「子どもが輝く幸せな子育て」「のびのび子育て・教育QandA」(共に「ほんの木」)。ペンネーム・藤村亜紀、「マンガでわかる食育」(幕内秀夫氏との共著「かもがわ出版」)などの著書も。

たくさんのご意見ありがとうございます

当日は、マスコミや市民100会の方を含め、約200の方が来場しました。聴講した方々の意見をご紹介します。

- ◆各分野の専門家の人達から大森山動物園の可能性の話が聞けて、秋田に活力が出る気がしました。
- ◆少子高齢化の中で魅力的でなければ、動物園が消滅してしまう。そうならないようにしてほしい。
- ◆上野動物園、旭山動物園などの色々な違いがわかりました。大森山動物園のコンセプトを守り、他の場との違いを守って行ってください。我々市民も、大人も行くようにこれからです。
- ◆各シンポジストの方々の話から、園をどの様に工夫改善したら動物達と共生出来るかなど、関係者が懸命に頑張っていることに感動した。これからも一市民として時間を見て動物達とふれあいたい。
- ◆動物園と多角的に捉えた提言の数々に、非常に意義深いシンポジウムでした。動物園の発展が野生動物を守り地球を救う、そのためにできることを自分でも考えてみたい。動物園はただ動物を見るだけでなく、色々学ぶこともわかったので、友人や家族、次世代にも伝えていきたい。自殺者が多い秋田で生命の大切さを伝えることができるよい場所であることを広く伝えていきたい。
- ◆本当に動物を愛しているからこそ、動物の命をつなぐ事を皆さんが考えている事を感じました。しかし、経営という事も重要であり、問題は多いと思います。機会を見つけ動物園を訪ねてみようと思います。
- ◆動物園はただ檻の中に入っている動物を見るだけと思っていましたが、旭山動物園の画期的な話をテレビで見て、すごく興味を持ちました。やはり一度は行ってみたいと思っておりました。秋田でも工夫しているようですが、一度行ったらまた一度行ってみたいような動物園であってほしいです。でも今日のお話を聞いて素晴らしい計画案があるようなので期待しております。

※一部のご意見のみご紹介しています。

- 1月 1日 / キョン「119」♀出産。(♂:体重850g)
- 1月 3日 / ミニチュアホース赤ちゃん、親から離れている時間が長くなってきた。
- 1月 5日 / キリン「ジュン」♂以前に比べ、落ち着きが出てきた。  
イヌワシ「ペア」目視で2回交尾行動を確認する。
- 1月 7日 マーコール「ヤワラ」♀削蹄実施。
- 1月 9日 ニジキジ同居実施。
- 1月 11日 / ワピチ「兄」♂発情期に入り、攻撃的になる。
- 1月 14日 / チンパンジー「ノリコ」♀同居個体の「ココ」♀に尻を嘔まれ出血。  
イヌワシ「ペア」交尾行動の頻度が増える。
- 1月 17日 ラクダ「テンテン」♀左前肢の跛行が酷くなっている。
- 1月 19日 ハリネズミ「トゲジロウ」♀子宮脱のため死亡。
- 1月 20日 ペンギン「右黒左黄♂×左青黄♀」1卵目抱卵確認。
- 1月 21日 マーコール「マー」♂削蹄実施。  
ワピチ♂、ラクダ♂発情中のため危険。
- 1月 22日 マーコール「ルー」♀削蹄実施。
- 1月 23日 ニホンザル'07生まれ7頭の入墨、トローバン刺入作業。(♂5頭、♀2頭)  
フラミンゴ「0719」♀左脚の足関節が壊死し、義足装着。
- 1月 28日 コウノトリ「タイサ」♂下嘴骨折。治療後室内に隔離。  
チンパンジー舎、水モートの氷除去作業。
- 1月 30日 / マントヒヒ「ばーちゃん」♀かなり動きが悪く、餌もほとんど食べていない。
- 1月 31日 / アフリカタテガミヤマアラシ♀下顎の皮膚が広範囲に欠損している。  
ペンギン「左黄黄×翼帯なし」産卵確認。
- 2月 1日 / マーコール仔「角有り」♀削蹄実施。
- 2月 3日 マーコール仔「ララ」♀削蹄、トローバン刺入作業。  
フラミンゴ「0719」♀義足を外し、断端の消毒を行う。
- 2月 4日 / チンパンジー「J太郎」♂輸送箱に慣らすため、訓練用の箱を室内に設置する。
- 2月 5日 / マーコール「ヤワラ」♀削蹄実施。  
カピバラ体重測定実施。「ユキ」♂(26.16kg)「レン」♂(29.61kg)  
出前ふれあい教室実施。(秋田市立豊岩小学校)
- 2月 6日 / コウノトリ「タイサ」♂嘴検査。
- 2月 7日 マーコール「マー」♂削蹄実施。
- 2月 9日 クロヅル♂肝膿瘍のため死亡。  
イヌワシ1卵目を産卵。

飼育日誌の情報はHPからもご覧いただけます

「ねずみどし」にちなんで、当園で暮らしている

## ネズミの仲間をご紹介します

リス科

プレリードッグ

ネズミの仲間=げっ歯目

(当園のげっ歯目は8科、10種)

ビーバー科

ニホンリス

ネズミ科

アメリカビーバー

ハツカネズミ

ダイコクネズミ(家畜)

ヤマアラシ科

アフリカタテガミヤマアラシ

アメリカヤマアラシ科

カナダヤマアラシ

テンジクネズミ科

テンジクネズミ(家畜)

カピバラ科

カピバラ

チンチラ科

チンチラ(家畜)

モルモット



ミニチュアホースの赤ちゃん  
右:「イルビー」♀2007.12.12生まれ

## 飼育動物数

(2008年1月末現在)

哺乳類	57種	292点
鳥類	55種	222点
八虫類	15種	34点
両生類	1種	2点
魚類	4種	15点
<b>合計</b>	<b>132種</b>	<b>565点</b>

げっ歯目：上下にそれぞれ1対の門歯(前歯)が発達し硬い木の実や木の皮などをかじることが出来る仲間です。



## ゾウの調教を始めて

飼育展示担当 鈴木 修

去年の4月からゾウの飼育担当になりました。見習い期間中は、監視役も務めながら先輩達が調教を行うのを後ろで見ていたのが日課でした。ゾウの調教は、人間の号令に従わせることにより、体をチェックして健康管理することを目的としています。見習い期間を終え、ようやく調教を始めることになりました。ゾウはとても頭が良い動物。まずはゾウに担当者だと認めてもらわなければなりません。少しずつエサを与えていき、顔や声を覚えてもらいます。

初めてゾウの前に立った日、その巨大さと威圧感に足がすくみ、正直恐怖すら感じました。これが地球最大の陸生動物アフリカゾウか。いつも遠くから見るゾウは穏やかで、優しい目をしていますが、その日だけは違う生物を目の前にしているようでした。この話を先輩達にすると、「誰でも最初は怖さを感じる。その気持ちを忘れずにゾウと接すること。でも馴れ合いは禁物。そして、凛とした態度でゾウに従わせること。おどおどしてはゾウは言うことを聞いてくれない。」と教わりました。今では雌の花子の調教を1人でも出来るようになり、日々の健康管理を行っています。

まだまだ若い2頭のゾウを大切に育てていきたいと思います。



花子の調教風景

## 動物病院から

## マーコールの蹄の治療

飼育展示担当(獣医師) 安永 千秋



大きな角が特徴のマーコールのオス



ハサミを使つての削蹄の様子



腐った部分(○の部分)をきれいに取り除きます。

マーコールは野生のヤギの仲間、オスにはらせん状に伸びた大きな角が生えています。

当園では、去年2頭の子供が生まれ、さらに他の動物園からメスが1頭仲間入りし、現在はオス1頭とメス4頭の計5頭を飼育しています。












ある日のこと、オスのマーコールの歩き方がおかしくなっていました。そこで、麻酔をかけて調べてみると、蹄が伸びすぎていて、さらに一部が腐ったような状態になっていました。これでは痛くて歩き方がおかしくなるのも当然です。蹄の伸びた部分を切り、腐った部分もきれいに取り除いて消毒しました。それからしばらくすると、今度はメスのマーコールも歩き方がおかしくなっているのに気づきました。捕まえて調べてみると、オスと同じような蹄の状態になっていました。そんな状態が全頭に繰り返し現れるようになりました。

野生では標高の高い山岳地帯の岩山などで暮らしているマーコールにとって、動物園の展示場のような土の地面だと、蹄が伸びすぎてしまい、病気につながってしまうのです。一部に砂利を敷いてみたものの、あまり効果はありませんでした。自然に近い環境に変えてあげるのが一番なのでしょうが、すぐにできることではありません。しばらくは定期的に捕まえて、蹄の治療を地道に続けるしかないようです。



2008年  
シーズン

# 年間スケジュール

	通常開園（開園期間中は無休）	3月15日(土)～11月30日(日)
	春の動物ふれあいフェスティバル	6月1日(日)
	第31回親と子のふれあい写生大会	7月下旬
	サマースクール(1回目)	8月2日(土)
	サマースクール(2回目)	8月4日(月)
	夜の動物園	8月14日(木)～8月17日(日)
	ナイトブージャズフェスタ	8月中旬
	動物愛護フェスティバル	9月中旬
	秋の動物ふれあいフェスティバル	10月12日(日)～10月13日(月)
	さよなら感謝祭(通常開園最終日)	11月30日(日)
	雪の動物園※2009年1・2月の土・日・祝日のみ開園	1月4日(土)～2月28日(日)

夜の動物園



動物パレード

※イベントは変更や中止になることもあります。

## 通常開園

時間：9:00～16:30(入園は16:00まで)  
 料金：大人1人500円(中学生以下無料)  
 団体割引：大人20名以上で1人400円

## 冬期開園

時間：11:00～15:00(入園は14:30まで)  
 料金：大人1人300円(中学生以下無料)  
 団体割引：大人20名以上で1人240円

※ 購入日から1年間有効の「年間パスポート」もあります。冬期開園でも使えます。

平日も楽しめる

# まんまタイム & エサやり体験

- ※1 まんま(ごはん)を食べるときの、生き生きとした様子をご覧いただけます。
- ※2 決められた動物たちにエサを与えることができます。(エサ代：1カップ100円)



ライオンのまんまタイム。  
今日のジャンプはどうか？



チンパンジーのまんまタイム。  
今日のチンパンジーはバナナをとる時、道具を使う？使わない？



アライグマのまんまタイム



トラのまんまタイム



「フクジロウ」君の調教

◆発行所 秋田市大森山動物園 〒010-1654 秋田市浜田字湯端154  
 ◆発行 小松 守  
 ◆電話：018-828-5508 FAX：018-828-5509  
 ◆HP：「大森山動物園」で検索  
 ◆E-mail ro-inzo@city.akita.akita.jp  
 ◆印刷：(株) フロム・エー

◆動物取扱業者の氏名 秋田市長 佐竹敬久  
 ◆事業所の名称及び所在地 秋田市大森山動物園 秋田市浜田字湯端154  
 ◆登録に係る動物取扱業の種別 展示 指令動-7-5-7, 貸出し 指令動-7-3-2, 販売 指令動-7-1-36  
 ◆登録の年月日 平成19年6月1日  
 ◆有効期間の末日 平成24年7月31日  
 ◆動物取扱責任者の氏名 西村裕之